

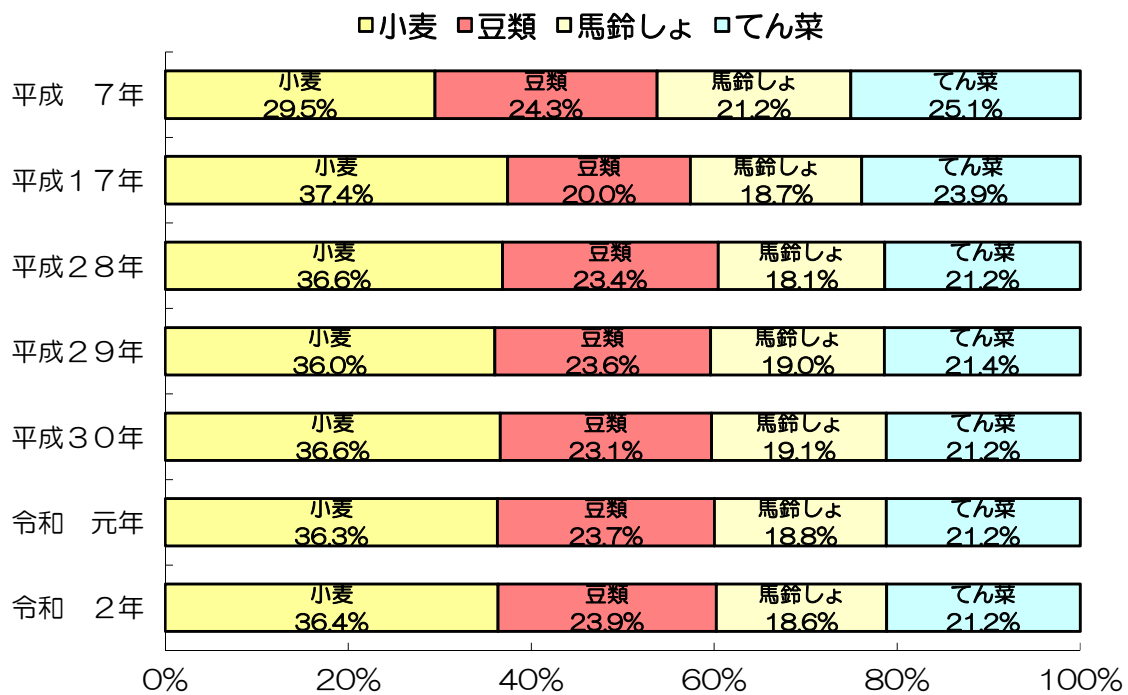
8 農業生産の概要(農産)

畑作

管内では、小麦、豆类、馬鈴しょ、てん菜の4品を中心とした大規模な畑作経営が展開されている。

近年、経営規模の拡大が進む一方、高齢化、労働力不足などの問題や収益性の面などから、特定の作物の作付偏重による輪作体系の乱れが見られるが、連作障害の防止や実需者からの安定供給の要望に応えるためにも、適正な輪作体系を維持することが必要である。

十勝における畑作4品の作付割合



(農林水産省「作物統計」。ただし豆类(大豆除く)は平成27年は農林水産省「特定作物統計調査」、平成28～令和2年は十勝総合振興局調べ)



【題名：やったよ!!】

令和2年度とち農産・農村フォトコンテスト
農業王国十勝の人間部門グランプリ賞受賞作品

8 農業生産の概要(農産)

(1) 小麦

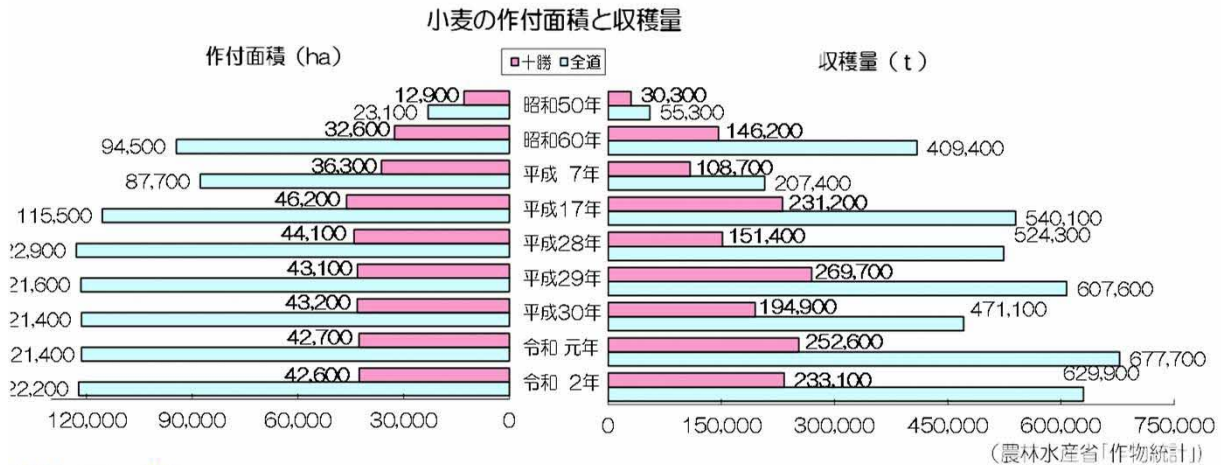
令和2年産の小麦の作付面積は、前年に比べ100ha減少し、4万2,600haとなった。10a当たり収量は、前年産に比べて減少し547kg、収穫量は23万3,100tとなった。

管内で栽培されている小麦は、秋まき小麦（うどん向け中力系品種）がほぼ100%を占めており、品種は、23年産より従来のホクシンからきたほなみに全面切り替えとなった。

一方で実需者からはパン用小麦生産の要望があり、春まき小麦（パン用向け強力系品種）も863haほど栽培されている。

また、24年産からは、中力系品種とのブレンドで優れたパン適性を発揮する超強力系品種ゆめちからも栽培されている。

なお、十勝産秋まき小麦は、各農協等で乾燥、調製された後、主に道外向けは広尾町十勝港にある十勝港広域小麦流通センターのサイロに運ばれ貯蔵されており、都府県への輸送にはバラ積貨物船が使用されている。



(2) 豆類

令和2年産の豆類作付面積は、大豆、小豆、いんげん合わせて2万7,944haとなった。

本道に占める管内の作付割合は大豆24%、小豆61%、いんげん75%を占めており、道内の豆類生産の41%が十勝管内で生産されている。

令和2年産の収穫量は7万2,391tとなった。



8 農業生産の概要(農産)

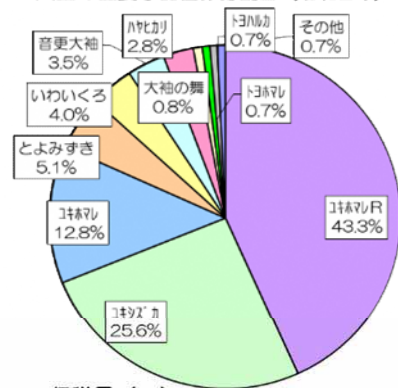
○大豆

令和2年産の大豆の作付面積は、前年に比べ130ha減少し9,280haとなった。

10a当たり収量は259kgと前年に比べ増加し、収穫量は2万4,000tとなった。

品種別の作付割合はユキホマレR、ユキホマレ、ユキシズカで8割以上を占めている。

大豆の主要な品種作付割合(令和2年)



大豆の作付面積と収穫量



○小豆

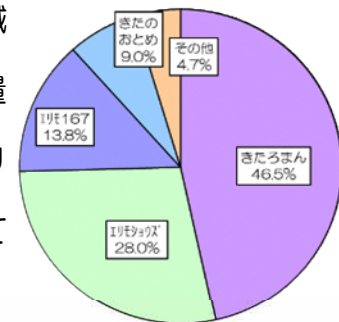
令和2年産の小豆の作付面積は前年に比べ約130ha減の1万3,503haとなった。

10a当たり収量は272kgと前年に比べ増加し、収穫量は3万6,762tとなった。

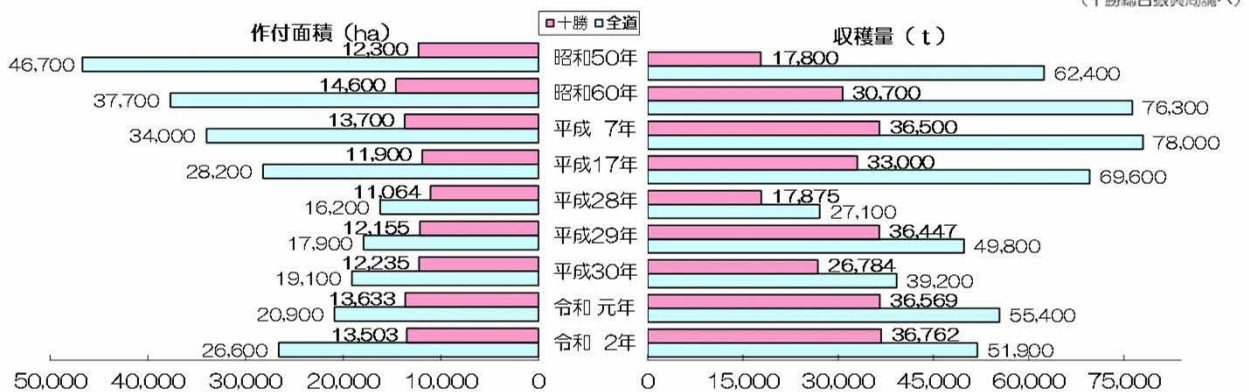
品種別の作付割合は、きたろまんが4割以上を占め、エリモショウズ、エリモ167、きたのおとめと続いている。

十勝産小豆は品質が良いことから、和菓子の原料として用いられることが多く、このほかには、汁粉、ぜんざい、赤飯での消費も多い。

小豆の主要な品種作付割合(令和2年)



小豆の作付面積と収穫量



(平成17年以前の数値は農林水産省「作物統計」、平成22年以降は農林水産省「特定作物統計調査」、ただし、平成27年の十勝の数値は農政部農産振興課「麦類・豆類・雑穀便覧」、平成28～令和2年は十勝総合振興局調べ)

8 農業生産の概要(農産)

○ いんげん

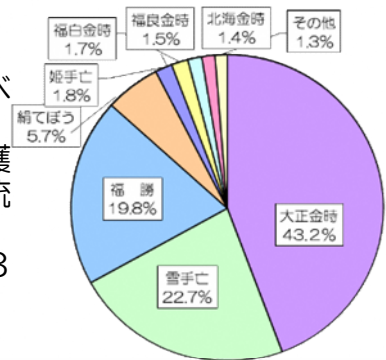
令和2年産のいんげんの作付面積は前年に比べ310ha増加し、5,161haとなった。

10a当たり収量は225kgと前年に比べ増加し、収穫量は1万1,629tとなったが、収穫期の降雨による色流れの影響で等級外の割合が多かった。

品種別の作付割合は、大正金時、福勝、雪手亡の3品種で約9割を占めている。

金時は主に煮豆、手亡類は白餡に利用されている。

いんげんの主要な品種作付割合(令和2年)



いんげんの作付面積と収穫量



(平成17年以前の数値は農林水産省「作物統計」、平成22年以降は農林水産省「特定作物統計調査」、ただし、平成27年の十勝の数値は農政部農産振興課「麦類・豆類・雑穀便覧」、平成28～令和2年は十勝総合振興局調べ。 ※「農林水産作物統計調査」の収穫量は一定の基準(品質・規格)以上のものの量とされ、「十勝総合振興局農務課調べ」は、農業団体等の集荷実績等を参考に調査を行っていることから、必ずしも整合性はな

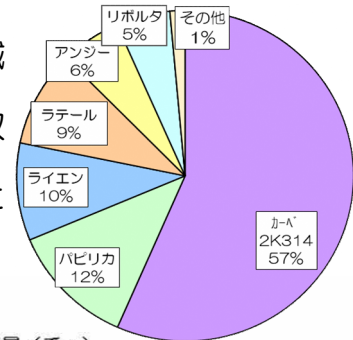
(3) てん菜

令和2年産のてん菜の作付面積は、前年に比べ100ha減少し、2万4,800haとなった。

10a当たり収量は6,920kgと前年に比べ増加したため、収穫量も前年より増加し171万7,000tとなった。

てん菜糖は家庭用として使用されるほか、菓子類の原料として用いられている。

てん菜の主要な品種作付割合(令和2年)



てん菜の作付面積と収穫量



(農林水産省「作物統計」)

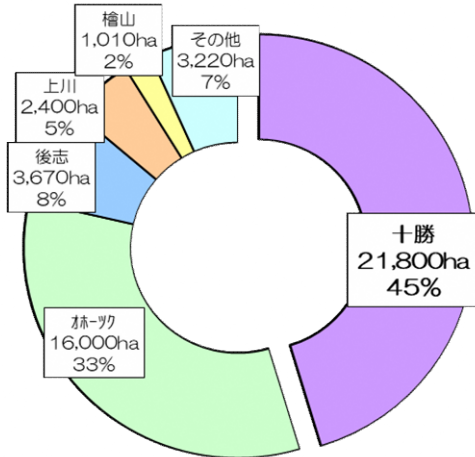
8 農業生産の概要(農産)

(4) 馬鈴しょ

令和2年産の馬鈴しょの作付面積は、前年より300ha減少し、2万1,800ha、単収は前年に比べ減少し、3,440kgとなった。収穫量は75万800tとなり、全道に占める割合は、作付面積で45%、収穫量で43%と、ともに全道一位となっている。

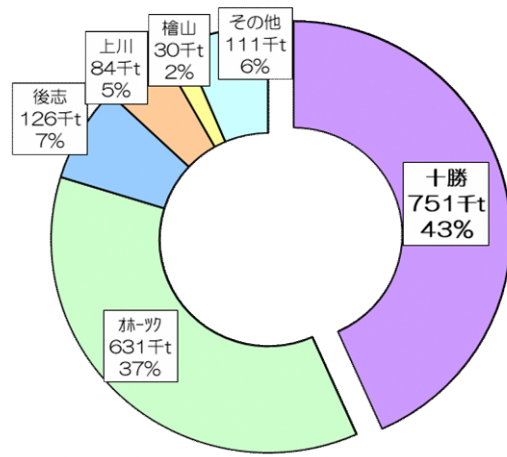
また、令和2年産の管内の用途別作付割合は、生食用23%、加工食品用45%、でん粉原料用2%、種子用10%で、主な品種は、コナフブキ(でん粉原料用)13%、トヨシロ(加工食品用)21%、メイクイン(生食用)11%となっている。

振興局別馬鈴しょの作付面積(令和2年産)



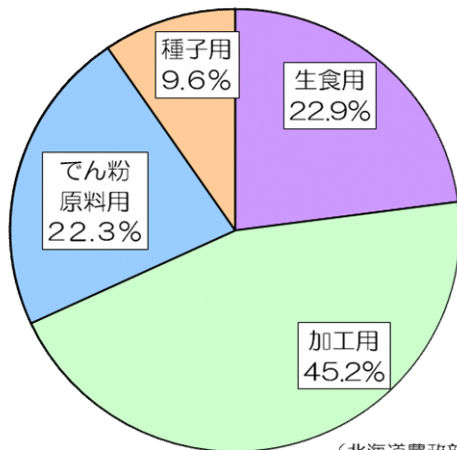
(農林水産省「作物統計」)

振興局別馬鈴しょの収穫量(令和2年産)



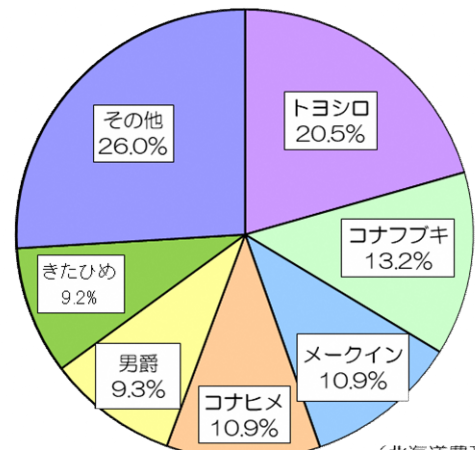
(農林水産省「作物統計」)

十勝管内馬鈴しょの用途別作付割合(令和2年)



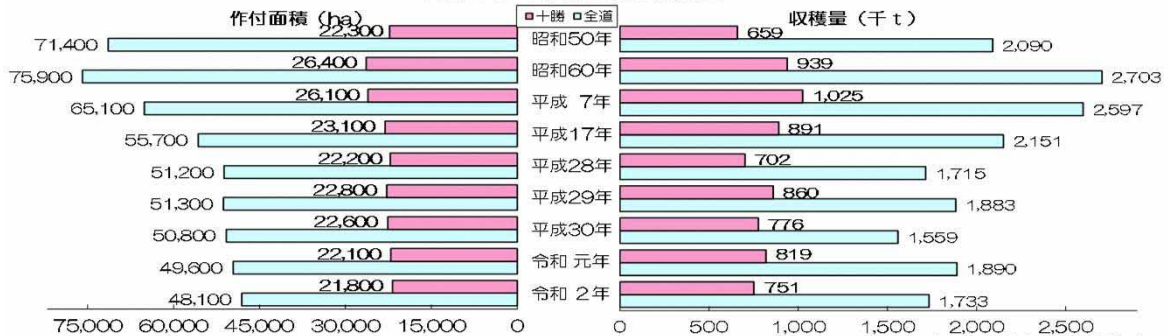
(北海道農政部調べ)

十勝管内馬鈴しょの品種別作付割合(令和2年)



(北海道農政部調べ)

馬鈴しょの作付面積と収穫量



8 農業生産の概要(農産)

(5) 野菜

令和2年産の主な野菜(31品目)の作付面積は1万689haで、露地野菜を中心に栽培されている。主な品目ではスイートコーンが3,018ha、にんじんが1,391ha、ながいもが1,328ha、えだまめが1,110haとなっており、これら4品目で全体の約6割を占めている。

また、生産者の所得向上のため畑作4品に加え、新たに野菜を取り入れる地域もあり、JA中札内村及びJA芽室町のえだまめ、JA帯広かわにしのがいも、JA音更町のにんじんなどが有名である。

<生産動向>

・根菜類

令和2年産の主な根菜類の作付面積は、前年より約178ha減少した。
10a当たり収量はだいこん、ながいも、にんじんで前年を上回った。

・葉茎類

令和2年産の主な葉茎類の作付面積は、前年より約37ha減少した。
10a当たり収量は、キャベツ、たまねぎで前年を上回った。

・果菜類

令和2年産の主な果菜類の作付面積は、前年より約343ha減少した。
10a当たり収量は、スイートコーンで前年を下回り、えだまめ、かぼちゃで前年を上回った。

(6) 果樹

管内は、厳しい気象条件であることから、果樹栽培には向かない地域とされてきていたが、近年の温暖化の影響などにより徐々に栽培する環境が整えられてきている。その中で池田町では、早くから地域の気候・風土に合った品種の開発や栽培方法の改良に取り組み、醸造用ぶどうが栽培されている。

最近では、池田町以外でも個人が自ら醸造用ぶどうを栽培する動きが活発化し、2019年8月には管内で56年ぶりとなる2か所目のワイナリーが帯広市に、2020年10月には芽室町に3か所目、2021年9月には池田町に4か所目のワイナリーが開設されている。

また、バイオマスエネルギー等を活用した果樹栽培など地域独自の取組も増えてきている。



【題名：息吹】

令和2年度とちか農業・農村フォトコンテスト
十勝の農村景観部門入選作品

8 農業生産の概要(農産)

(7) 花 き

管内では大規模土地利用型農業が展開されているため、花き栽培はあまり盛んに行われていないが、小規模ながら切花、鉢物、花壇用苗物等が栽培されている。

<主な品目>

【切花】

カーネーション、トルコギキョウ、アルストロメリア、デルフィニウムなど

【鉢物】

ペゴニア、シクラメン、ポインセチアなど

【花壇用苗物】

マリーゴールド、サルビア、ペゴニアなど

(8) 水 稲

かつては管内でも水稲栽培が広く行われていたが、現在は大規模畑作経営が中心で、水稲の作付面積は令和2年産で13haとなっている。うち、うるち米が6ha、もち米が7haで、音更町、幕別町、池田町で作付けされている。

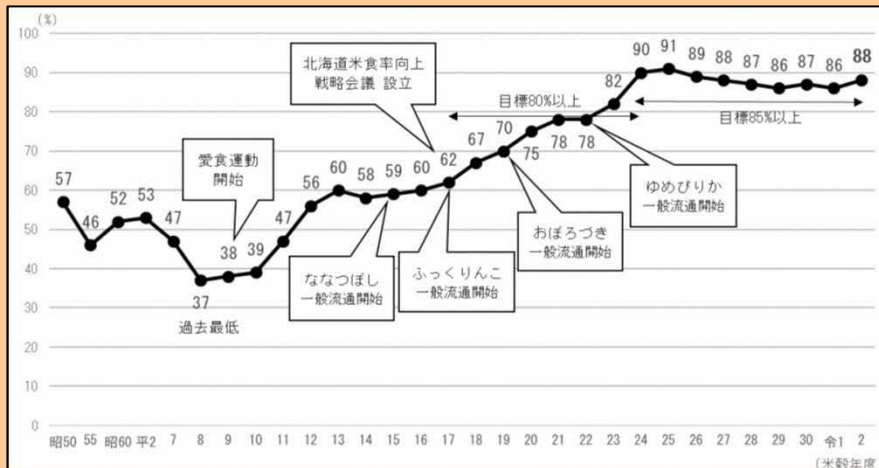
<北海道米食率向上戦略会議の取組>

北海道米の品質は着実に向上しており、(一財)日本穀物検定協会による令和元年産米の食味ランキングでは、「ななつぼし」が11年連続、「ゆめぴりか」が10年連続で最高ランクの「特A」を獲得するなど、全国的に高い評価を得ています。

北海道農業にとって重要な位置づけとなっている水田農業が、これからも発展していくためには、多くの皆さんにもっと北海道米を食べていただくことが大切です。

このため、平成17年1月、道内における北海道米の消費拡大を図ることを目的として、関係機関・団体で「北海道米食率向上戦略会議」を設立し、北海道米の道内食率向上を目指して北海道米のPRなどに取り組んできた結果、平成8米穀年度に過去最低の37%であった道内食率は、令和2米穀年度には88%となり、戦略会議が目標とする85%以上を9年連続で達成しています。

北海道米食率向上戦略会議では、引き続き道内食率85%以上の着実な維持と、お米の消費拡大を目指し、一層の取組を展開してまいります。



ほおぼる。がんばる。
北海道米LOVE

